

令和7年度 太宰府西中学校 校内研究推進計画

研究主題「自ら学ぶ生徒を育成する学習指導法の研究」

～生徒を主語にした単元デザインを通して～

1 主題設定の理由

(1) 本校の教育目標及び学習指導要領から

本校の教育目標は「自ら輝き、成長を続け、なかまと共に心身逞しく、未来を創造する生徒の育成」である。その上で、学習面におけるめざす生徒像を、「自ら課題を見つけ、その解決に向け、意欲的に学習を進め、知識や技能を習得しようとする生徒」、「見通しをもって学習に励み、自分の学習を振り返るとともに、さらに学習を進めようとする生徒」とし、日々の教育活動を推進している。このことから、本年度の校内研究の主軸を「自ら学ぶ」とすることで、自分事として主体的に学習に励む生徒の育成を目指すこととした。

「中学校学習指導要領解説総則編」では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」について、「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。(中略) 生徒が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」と明記されている。田村(2018)は、「資質・能力とは、それが発揮されている姿や状態が積み重ねられ、繰り返されることによって育成されると考えるべきであろう。」とし、一連の問題解決のプロセスである単元構成の重要性について述べている。このことから、生徒自ら学び、資質・能力を繰り返し発揮することができる単元づくりを研究の主たる手立てとして設定した。

(2) 本校生徒の実態から

本校の生徒は、生活態度、学習態度ともに落ち着いており、教科等の学習に真面目に取り組むことができる。しかし、全国学力・学習状況調査、福岡県学力調査、学力診断テスト等では、学年や教科によって全国・県平均を下回っている。また、令和6年度全国学力・学習状況調査質問紙調査において、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問項目について、「あてはまる」と回答した生徒は、26.3%（全国比-0.9）であった。また、否定的回答をした生徒は全国比+2.3%であり、基礎学力の定着や学習意欲の向上に関するC・D層への手立てが本校の喫緊の課題であることが明らかである。落ち着いた態度で日々の学習に取り組んでいるものの、その姿勢は受け身であり、「わかったつもり」、「できたつもり」の状態で満足し、学習内容を定着させることができていない生徒が多数いることが推察される。

(3) これまでの研究の歩みから

本校では、令和元年度から、「協働的な学び」や「振り返り活動」を位置付けた授業改善を目指し、教職員の意識改革、対話的な授業づくりに取り組み、ICTを活用した協働的な学びの在り方や振り返りの視点等について明らかにすることことができた。しかし、課題として、小集団活動が一部の生徒によって進んだり、生徒自身が学習のゴール像を明確に描かない状態で授業が進んだりするなど、受け身になっている生徒が多いことが挙げられた。中央教育審議会答申(2016)には、「まず学習する子供の視点に立ち、教育課程全体や各教科等の学びを通じて「何ができるようになるのか」という観点から、育成を目指す資質・能力を整理し、その上で、整理された資質・能力を育成するために「何を学ぶか」という、必要な指導内容等を検討し、その内容を「どのように学ぶか」という、子供たちの具体的な学びの姿を考えながら構成していく必要がある。」と述べている。そこで、昨年度より、生徒主体の授業づくりを目指し、学習者と授業者、双方の視点を往還した授業改善を行うこととした。昨年度は、単元全体を見通した授業づくりの重要性について再認識することができ、単元のゴール像について、生徒にとって必然性があるものを、学習指導要領と生徒の実態を往還しながら設定するという設定の方向性が明らかになった。また、アウトプット活動について、各教科の実践例が多数挙がり、協働的な学びを日常的に推進することができた。しかし、各教科の「見方・考え方」を働かせながらも生徒の学習意欲を引き出す学習課題について、更に充実する必要性が出てきたため、今年度は、昨年度までの研究主題を引き継ぎながら、更に具体的な手立てを講じる。

2 主題及び副主題の意味

(1) 「自ら学ぶ生徒」とは

- 単元のゴール像を捉え、問題解決についての見通しをもつ生徒
- 問題解決の過程で、自らの考えを表出したり、再構築したりする生徒
- 自らの学習の過程を振り返る生徒

答申（2016）において、「主体的・対話的で深い学び」について、主体的に学習を見通し、振り返る場面やグループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、子供が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点の重要性について示されている。

また、田村（2018）は、「主体的な学び」について、子供自身が自らの学びをコントロールできることとし、自分ごとの課題を、自分の力で解決し、その過程と成果を自覚する必要性について述べている。

そこで、本研究では、上に示したような生徒を「自ら学ぶ生徒」ととらえる。単元や一単位時間の導入、展開、終末、すべての場面において、「自分で学ぶ」、「自分が学ぶ」という意識をもって学習に臨めるよう、子供たちの具体的な学びの姿をイメージしながら授業構成を組み立てていく。

(2) 「生徒を主語にした単元デザイン」とは

以下の視点に留意した単元構成のことである。

- 生徒が単元や一単位時間のゴール像を捉え、自らの学習に見通しをもつ場の設定
→ゴールに向かう過程の中で、各教科の「見方・考え方」を働かせながら、生徒が必然性をもって解決できる単元（一単位時間）の課題を設定する。
- 生徒が自分の学びに責任をもち、自分で学ぶ活動の場の設定
- 生徒が一単位時間や単元の終末など、必要な場面で、自らの学習の過程を振り返る場の設定

本校では、「生徒を主語にした単元デザイン」について、次のような手順で構想する。

① 「見通す」

生徒が単元や一単位時間のゴール像を捉え、自らの学習に見通しをもつ場を設定する。

※**ゴール像**=生徒が何を理解し、何ができるようになればよいか、具体的な生徒の姿

学習の見通し=単元終了までの学習計画

- (1) 学習指導要領に明示されている単元などの内容のまとめに応じて育むべき資質・能力を確認する。
- (2) 生徒の実態に応じて、どのように資質・能力が發揮されると目標達成となるか、単元や一単位時間のゴール像を、学習終了時の具体的な生徒の姿や発言として想定する。
- (3) 単元や一単位時間の学習を通して何ができるようになればよいか（ゴール像）、どのように学ぶのか（見通し）を生徒にとってわかりやすい表現で提示し、生徒と共有する。
→ゴールに向かう過程の中で、各教科の「見方・考え方」を働かせながら、生徒が必然性をもつて解決できる単元（一単位時間）の課題を設定し、提示する。

② 「学び深める」

生徒が自分の学びに責任をもち、自分で学ぶ活動の場を設定する。

毎時間の学習過程にアウトプット活動を位置づけるなどして、生徒が主体的に学習に臨むための手立てを計画する。

※**アウトプット活動**=自分の考えを書いたり話したりして表出する活動

- (例)・学習課題に対するはじめの自分の考えを書いて表出する場
- ・ペアやグループでの対話活動のはじめに、各個人の考えを伝える場
- ・他者との対話活動をふまえ、再構築した自分の考えを書いて表出する場

③ 「振り返る」

生徒が一単位時間や単元の終末など、必要な場面で、自らの学習の過程を振り返る場を設定する。

単元のゴールを想起させ、その達成に向けてどのように学習に取り組んだのか、自らの学習の過程を振り返らせる。

《一単位時間の振り返り》

単元のゴールに向けて、その時間に何ができたか、不十分な点は何か、本時の学習の過程を振り返る。

《単元の振り返り》

単元のゴールに向けて、単元を通して、どのように学習を進めることができたか、不十分な点は何か、単元を通した学習の過程を振り返る。

3 研究の目標

自ら学ぶ生徒を育てるために、生徒を主語にした単元デザインの在り方について究明する。

4 研究の内容

- 具体的な生徒の姿として単元のゴール像を想定することを起点として単元構想を練り、ゴールに向かう過程の中で、各教科の「見方・考え方」を働きかせながら、生徒が必然性をもって解決できる単元（一単位時間）の課題を設定すること。
- 一単位時間の中にアウトプット活動を位置づけるなど、生徒主体とするための手立てを計画すること。
- 一単位時間や単元の終末など、必要な場面で、自らの学習の過程を振り返る場を設定すること。

5 具体の方策

○グループ全研の実施（6月）

A（国・英・社） B（数・理） C（体・技家・音・美） D（特別支援）の4グループで全研を行う。

①各グループ代表者（4名）の授業公開及び参観

②各グループでの意見交流会

③講話（外部講師）

○主題研究に基づく授業公開（9月～12月）【1人1回】

①8月夏季研修における各教科での授業検討会の実施（単元デザインシート及び授業公開シートの作成
※研修会までに）

②授業公開及び参観（シートの修正及び提出 ※授業公開日3日前までに）

③意見交流会（授業公開日の放課後）

○各教科の成果と課題作成及び共有（1月上旬）

・校内研修会にて各教科内で協議の上、成果と課題をまとめる

○研究のまとめ作成及び来年度に向けた審議（2月）

・研究のまとめの共有

（単元デザインシート、授業公開シート、各教科の成果と課題を1つのPDFデータにして全職員に配付）

・主題研に関するアンケートの実施（個人の反省を含む）

・来年度の方向性に関する審議（研究推進委員会）

中央教育審議会『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』（2021）

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（2016）

田村学著『「ゴール→導入→展開」で考える「単元づくり・授業づくり』小学館（2022） 田村学著『深い学び』東洋館出版社（2018）

安川康介著『科学的根拠に基づく最高の勉強法』KADOKAWA（2024） 友田真著『自ら学びをコントロールする力を育む自己調整学習』明治図書（2024）